

### 〔Ⅲ〕 授業と集団とのかかわり

#### — 授業形態と学級活動を中心として —

丸 山 豊

#### 1. はじめに

前年度22集紀要で『生徒の疑問、質問からみた歴史学習』と題し、生徒の問題意識の掘りおこしと教師の与える課題設定とのつながりを、授業の流れの中にすえて考察してみた。そこでの問題点を次のように指適した。すなわち「教科指導の限界性をのり越えるために、学級集団、学習集団、生徒集団と授業の密接な相互関係を考えないと問題の本質に近づけない。」ということである。

本年度は昨年の教科担任学年（76年度入学中1）を、直接担任として一年間指導できる機会に恵まれ、教科に於て引き続き社会—歴史を担当することになった。そこで、この一年間の指導の中から、学級集団のあり方と授業の接点を探りつつ、本論のテーマに迫ってみたい。

#### 2. 授業展開とその話し合いより

授業がうまくいかない時、私たち教師はその原因をすぐ生徒の側に押し付けてしまう。生徒にいわせると「先生の教え方」に問題があるという、そこで教師は様々な授業形態を試みる。しかし生徒が真に学習の主体者になりきっていないと、いかなる授業形態も形式論に終始してしまう。生徒が「学習の主体者」になる一とは、具体的にどんなことなのか、どうすればそれが可能なのか。

教材論と同時に、学級—集団の問題が浮びあがってくる。生徒自身が学級に対しまず主体者たりうるか否かが教科指導の限界をのりこえる大きな要因となるように思われる。

ここで歴史の授業展開を紹介しつつ、教科の中で集団がどうかかわるのか考えてみたい。

#### ① 授業の流れ—キリスト教がどのようにおこりど う広まったのか—（V. T. R. 録画）

1. 前時の復習……ローマ帝国の成立—発展をTP.
2. 世界の三大宗教はどこでおこっているか
3. なぜキリスト教が西アジアでおこったのだろう
4. イエスの生いたちと思想について
5. キリスト教はどちらへひろまっていったのか  
それはなぜか—話し合い課題—

6. ローマ帝国にとってキリスト教はどんな存在なのか

7. 次時予告（仏教についても考えてみよう）

②あるグループの話し合いより（男2,女3,5名グループ）

キリスト教は、どちらへ広まっていったのか、それはなぜだろう。（3分程度の話し合い）

- どうして、こっちに広まったか、どうして、こっちはいかなかったの
- こっちって、どっち
- 東の方には、西には……
- だいたいどこの国
- ここで追放された、自分たちだけを助ける宗教がそうでなくなった。ここで殺されちゃったわけでしょ
- 痛めつけられている人々がこちらの方にいるから広まったんじゃない
- アー、こっちの方が、そういう人たちが多かった
- だって、どうしてこっちの方、メソポタミアの方へは広まらなかったのか……
- どうしてかな、何か理由があるのかな
- アメリカの方？
- かわいい山？
- ……地形のほかに……何か理由？あそこらへんは山だよ。メソポタミアにはまだ（大きな）宗教がでてきていないんだもの……
- こんだけがローマ領なんでしょ？

この話し合いを分析してみよう。まず集団の中における話し合いの意義だが、

- 一応全員発言しているが班内における意見対立がない。教師の課題の与え方の問題と、自分の考えを十分発表しえない弱さの2つが考えられよう。
- アジアへ広まらなかった理由を単に地形上の問題ではないとした認識は、他の生徒の問題意識を揺り動かすものではないか。
- 3分程度では、表面的にならざるをえない。

すべての集団で、この程度の話し合いがスムーズになされ、新たな対立により問題意識が深まっていくことを教科ではねらうわけである。学級集団とのかかわりで述べるなら、上記グループの成員が他教科および教科以外でどのように問題意識をもち行動するかを明らかにせねばならない。その視点がなかなか定まらず、教科と集団との関係を解明するのはむずかしい問題をかかえているといえよう。

### ③ 全体思考の場で

次に前述した課題を学級全体で考えるわけである。ここでのねらいは、集団思考がなされたかどうかである。以下、この課題に関する話し合いの内容を例挙する。

Y子。どちらへ広まったというのは、ヨーロッパ。なんていうのかな。そのころヨーロッパってというのは、ローマ帝国かなんかに支配されていたわけでしょ？それで愛にうえていたと言ったらよいか……。大きな宗教がなかったから、それから一応、人がそちらの方へ行った。

T男。ヨーロッパ方面へ広がって……。理由はそっちの方に奴隷とか貧しい人々がいた。

K子。地中海側、ローマ帝国の属州みたいなかんじ、そこで奴隷たちが貧しくて助けを求めて広まったと思ったんだけど……。ここで一つ疑問がでてきたのは、どうして東へ行かなかったかということで話し合っ……。地形、山があるでしょ？たった地形だけの問題で……。他に理由があるんじゃない？

S子<sup>(注1)</sup>。西の方はローマ帝国へ広がっていったんでしょ私が思うには、さっきのO・H・Pでみた時、ローマ帝国は二つの柱でできていて、下の二本の柱(属州、奴隷)はほとんど人間扱いされなかったって習った記憶がある。上の方の人たちは普通に生きていたんだけど下の方の人たちはユダヤ人のことを自分とよく以てると思ったんじゃない。

上の方の人たちより下の方の人たちに(キリスト教が)一般的に広がっていたので、ローマ帝国に広がった。

(中 略)

A男。“汝の敵を愛せよ”上の方からキリスト教が入ってきてもいいんじゃないか。

B子。キリスト教の考えからいくと、汝の敵を愛せよ、とは、上の方の者から奴隷を愛せよということになるからおかしい

Y。余り広まっては(上の方の人たちとしては)こまるのではないか。

H。○(東の方へ広まらなかった理由について) 東の方では東の方である宗教を信じ切っていた

結論から述べるなら、上述した授業は、教科として学級集団のあり方と無関係に成立しうる程度のもので、学級集団とのかかわりについての資料とはいえない。

## 3. 授業における集団のあり方

教師が授業の中で学級集団とは無関係に小集団を組織していくとき私は次の三点が重要と考える。

- (1) 生徒が得た知識を土台として、生徒の中から生れる問題意識を授業の中で予想し組み入れる。
- (2) 教材研究における教師の論理性を明らかにし、教師自ら問題意識を深めていくような展開を発問としておさえる。
- (3) 生徒の問題意識を授業の中で変化せしめ、深めるための方法(本論ではそれを集団思考としてとらえているのだが)を、授業形態と同時に考える。

### ① 集団思考と小集団

「生徒同志による問題意識のぶつけ合い」が彼らの新たな意識化のため授業の中で必要となる。前述の授業でもK子、A男などがそのきっかけをつくっている。このような状況をどうつくりだすか……。よりつくりやすい授業形態をあげるなら、一斉、発表、グループ、などよりも小集団学習の方が優れているだろう。

しかし、今日、集団学習のすすめ方とか、バズ学習のルール、挙手のさせ方、話し合いの訓練といった技術研究が盛んにおこなわれており、教師も生徒もその条件づくりを学ぶと授業が質的に高まり、かつ生徒の問題意識も深まるという信仰めいたものさえ生まれつつある。

小集団を取り入れなくとも、生徒の問題意識と教師の課題が絡み合い、かつ生徒が学習の主体となりうるなら一斉学習でも集団思考は可能である。しかし、現状をみる限り、教える側の経験と相当深い教材研究にその方向性がないと、中高という発達段階から考えて困難といわざるをえない。

たとえ小集団をとりいれても、その学級がどう集団化されているかによって全く違ったものになる。つまり集団に対する生徒と教師の意識が授業を支える基盤の一つであることを確認しておかねばならない。

※補注 全国生活指導研究協議会編『学級集団づくり入門第2版』では授業における集団過程として次のように述べている。「集団の中に分裂や対立をきわだたせることによって、ひとりひとりの子どもの学習に対する主体性を引き出しつつ、彼の個人的思考を活発にしていくと同時に、この分裂と対立をとおして学習

集団が、より正確に科学的真理の習得をおしすすめ」  
 の中に集団過程が展開されるとし、「学習集団の問題は、  
 助け合い学習や発表学習やバズ学習などのいわゆる集  
 団学習、グループ学習のあれやこれやの形態の問題で  
 はない」と言い切っている。そして「どのような集団  
 学習の形態をとるかは、当の学習集団の自己指導力に  
 よって決定されるものであって自己指導力がたかまれば  
 あえて集団学習、グループ学習の学習形態をとる必要  
 はない」としている。(P105)

② 授業と集団との接点と教師

本校の中学の現状からすると“集団”という視点から  
 は余り取り組みがなされずミニ高校版の授業が主流  
 をなしている現在、授業—集団—教師のあり方には大  
 きな問題をかかえているといえる。

また、集団の中で仮りに生徒が意欲的になったとし  
 ても、それぞれの授業、または、それ以外の場で彼ら  
 を伸ばしていく方向性の確立が必要となる。

4. 学級の集団化への試みと生徒の対応  
 (中2Bの実践から)

52年度担任として中2Bの学級集団化を計画的にす  
 すめてみた。以下集団の育成上の困難点、また集団に  
 対する生徒の意識、および授業への対応について述べ  
 てみたい。

① 本校における学級集団育成の問題点

—小人数ということ—

1学年2クラスという大都市では貴重な?学年編成  
 でどれだけ学級の集団化が可能なのか、進級に伴う新  
 鮮な気力は薄れ、慣れ合いたる雰囲気のまま最高学年と  
 なる。それが学校全体の無気力化にもつながる。

—高校の併設中学校的性格—

リーダーとなる素質を持っていても高校にたよりが  
 ちであり、自立する機会に恵まれない。

—過保護と放任—

生徒個人を掌握できるため、何事も教師サイドで  
 決定し、生徒が自らの手で計画、実行していくという  
 場面設定が少ない。

このような問題点を感じつつ、集団への取り組みを  
 初歩的な段階から試みていった。

班の編成、S.Tのプログラム化、日直班の点検、各  
 班主催の文化活動のL.Tでの位置付け、学級一班目標  
 の設定、班ノート、班長会議、新聞の発行、定期テス  
 トへの取り組み、文集の発行、……などである。

学年2クラスのため、もう一方のクラスだけが比較、  
 対象となり学年の集団づくりという観点の必要性を感  
 じた。

② 集団の認識過程—F班の変化、班ノートより—班を  
 核として学級の集団化をすすめた場合、生徒が集団

に對しどう意識を変化させていったのか、以下、F班  
 の例より探ってみる。

4月当初、担任が学級の方針を示し強引に班体制に  
 踏み切った時、生徒は真二つに分かれ賛成、反対と対  
 立した。すばらしいクラス—自分たちで作りあげるク  
 ラスになるならやってみようという合意でスタートし  
 た。F班はこうした中でも班制反対が多かった。

F班のメンバー

- A. 班長、問題提起をする。
- B. 中1より孤立化
- C子 成績第一主義、自称「しらけた子だった」
- D子 無口、目立たず
- E子 まじめに考えるが妥協をしない子

班長Aが「なんだろうシリーズ」と題し、自分の問  
 題意識を班にぶつけていく、班員はそれに答える形で  
 ノートが回され、また新たな問題を提起していくパタ  
 ーンができあがった。簡単に抜粋、要略してみる。

- 4.16 A. 班長って何だろう、自分がやりたく  
 ないから司会を他にやらせる授業だけ  
 の班長、何のための班長か。
- 4.20 C子 おしつけの班長はおかしい、学活で  
 他の班も交えて話し合ってみたい。
- 4.21 E子 S.Tの司会がうまくいかなかったこ  
 と、グループをつくってまとめるより、  
 まず、はじめにクラスをまとめなけれ  
 ばいけないんじゃないか、グループ同  
 志対抗になってしまうのではないかな  
 あ

(班による集団づくりへの不満の声をE子はS.Tの  
 司会失敗から担任に向けて書いてきた。)

- 4.23 A. S.Tで何だろう、反省しようにも目  
 標がない。班の目標を立てたらどうだ  
 ろう。

(E子に啓発されて書く。F班はこの週、日直班と  
 して清掃点検、S.T司会、日直の仕事を行なって  
 きた。)

- 4.29 E子 日直を経験してF班はひきしまっ  
 てきたんじゃないか。

- 4.30 A. “班”で何だろう。早く班体制を成功  
 させたい。このままだと中1の時のよ  
 うに何事もなく1年を過してしまう気  
 がする。S.Tだけの班じゃないか。だ  
 から班制反対がでるのだ。だから班長  
 会でクラスソフト大会を引き受けた。

(クラスソフト大会の成功がF班に自信をつけ、集  
 団を認識させた。その後F班は学級活動、社会科  
 においてクラスの先導的役割りを果していく。)

- 5.4 E子 班がまとまっているとは、どんなこと、先生、班のまとまり……班がまとまっていることは具体的にどんなことなんですか。一カ月班制をやって、やはり班があった方がいい。1つの班がまとまってこそソフト大会も成功した。
- 5.6 D子 昼の弁当、自分のクラスで食べないといけないのでしょうか。  
(新学年になっても、2クラスの編成のため旧A・Bに別れて昼食をとる傾向あり。担任としては学級を意識化させるため、昼食を自分のクラスでとるように指示。猛烈な反発あり。)
- 5.7 A. あたりまえのことをしないのは、どうしてだろう。班制は成功しつつあるが、授業が始まって席につかない。席についているのがあたりまえ、あたりまえほどもんどうなものはない。
- 5.11 D子 第2回レクリエーション大会、すごくよかった。クラスが1つになった。A君の「あたりまえ」についての意見すごく感動しました。
- 5.12 E子 私、今このノートみててすごいな……て思ったんです。だって1カ月でこんなにいっぱい使っちゃったんですもの、みんな真剣に考えた意見をかけるなんて、F班がまとまっている目印じゃないのかな
- 5.14 A. 話し合いがすすまないのは、なぜなんだろう。班内で意見が2つに分かれた。すごく重要な役割りを果している、意見が真二つになるような、先生もそうなる質問を出して下さいますといひんですけど

F班の変化は、班長Aの問題提起によるところが大きい。それを班員は集団の問題として受けとめ解釈、批判している。初めて主催した学級ソフト大会の成功が彼らの自信を強め教科にも波及していった。F班解体の最後、D子は1年生時代を振り返って「私は何とやらけた1年生を過したのだろう」と語っている。集団の組織化は、こうした意味からも積極的に推しすすめる必要がある。

F班のメンバーは班替えで次のように分散していった。A—7班、B—5班、C子—4班、D子、E子—3班。そこでA、B、C子、D子の4名は班長に立候補してF班の路線をうけ継ぐことになった。まさにF班メンバーによるクラス改革の第1歩が始まった。

Aの属する7班は、期末テストへの集団的学習の取

り組みを開始し、D子の4班は班長、それぞれ次のキャンプを目指して活動していく。しかし、D子、E子の3班は、5班の路線に対立批判的な生徒と最後までかみ合わず失敗を経験し新たな問題をかかえていく。

## 5. おわりに

集団を育成し、学級活動の中でそれらを生かした場合、各教科にどう反映していくのであろうか、これが私の問題意識の出発点であった。授業の中における集団のあり方ではなくて、授業以外の場で彼らが教科よりもより深い何かを学びとること—少なくとも社会科としてはそこまでを求めているのだが—の達成がどの程度可能なかは、現在結論に至っていない。

しかし、生徒が逆に授業の集団化を要求したり、教師の与えた課題の内容に新たな注文つけるといった変化はみられる。そんな意味に於て、教生にとって苦手なクラスであったようだ。

中2Bは班を核にした集団化と歴史の授業における学習集団の活用之二面から一年間を終えた。学級集団づくりという観点からは全く初歩的で問題も数多くあろう。この実践の中で大きく変化した生徒も何人かみられる。(注2)しかし、大半の授業が彼らを積極的に授業の場に引きだしえないまま終わってしまうが現状であった。

今後はこうした問題を解決するため、横のつながり—学年、他教科への発展および縦のつながり、中3→高1への成長を積極的におしすすめたい。

(注1) S子は昨年度紀要22集で抽出し研究した生徒。

(注2) 三学期最後の班替えは「班長をやらなかった人に」のローガンで無理に推薦されたY子は、三学期班長をやり終えて文集第3集につきのように書いている。

……この一年間、自分にとって初の体験、一班の班長、なんだか無我夢中のまま終わってしまったようですがずいぶん勉強になったと今では感謝しています。その成果は好ましいものかどうかは少々疑問ですが、自分なりに班をまとめ自分にとっては大いにプラスになったのですから、それで充分です……。

控え目な表現だが、あの内向的な、そして登校を渋って母親を困らせたというY子のこの文章に、一年間の疲れを忘れる思いがする。彼女が班長として取り組んだ一班の研究、討論会「戦争について」は見事成功し、社会科(歴史)の授業の中での集団ではとうてい達成のできい成果をおさめた。学級集団の中から生まれたものであろう。私はそのあとすぐ歴史の授業で—NHK『東京大空襲』のV.T.R.を見せたのである。